

幼児期における模倣行為があいさつに及ぼす影響

—子どもと同じ目線に配置するあいさつ—

情報メディア学科 大島 直樹ゼミ

1023065

郷司 稜大

1 はじめに

人は他人との関わりを持つ時にあいさつを行っており、日常生活の自然の行為で、知らず知らずに家庭内などのしつけなどで定着している。しかし成長するにつれ、あいさつをしない子どもが増加しているという事例がある[1]。その主な原因は「恥ずかしい」・「警戒」・「面倒くさい」などである。そこでそのような感情が芽生える前の幼児期にみられる模倣期を活用することで、あいさつを身に付けやすくできると想定する。

本研究の目的は、幼児期における模倣行為があいさつに及ぼす影響を明らかにすることである。

2 あいさつとは

あいさつとは、人に会ったり別れたりするとき、儀式的に取り交わす言葉や動作、儀式・会合などで、祝意や謝意、信愛の気持ち、あるいは告示などを指す。また、あいさつの中にはお辞儀と握手が含まれており、両者ともあいさつとして行われる。本研究ではあいさつの中でも特にお辞儀を取り上げた[2]。

次に、あいさつの必要性に着目した。青木は、あいさつが必要な理由を心理学者であるアブラハム・マズローが提唱している「欲求5段階」の中の「承認欲求」を満たすためであると述べている(図1)[3]。

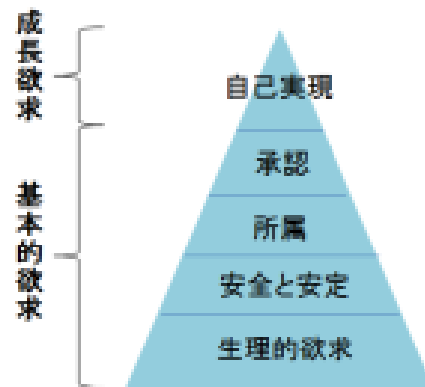


図1 欲求5段階

この承認欲求を満たすためには、相手が起こした行動に対して何かを伝える(行動承認)、相手の存在について行うもの(存在承認)があり、どちらかを満たす必要性がある。行動承認(褒める・許す)と存在承認(あいさつ・名前を覚える)の比較をすると存在承認の方が、他者を誉める・許すという行為よりも、他者のあいさつや名前を覚える方が容易である。

つまり、存在承認(あいさつ)を行うことで承認欲求を満たすことができ、あいさつがなぜ必要なのかに結びつく。

3 発達段階と模倣とあいさつとの関連性

発達は、耳や目から入ってきた情報だけでなく、五感すべてを使って情報を取り入れる事で発達の促進に繋がる。更に身体を動かすことで経験を積み重ねるとより発達力が増す。

このことから、経験を積み重ねる事で発達力が増すというところが模倣(まねならう)ということで発達力の促進にも繋がる。

4 実験・検証

あいさつや発達などの調査をした結果やアンケート調査を元に、コミュニケーションが自然に身につくようにするために幼児期の頃からあいさつの習慣をつける新たな教授方法を提案した。

4.1 アンケート調査

10月12日、13日(北海道情報大学 蒼天祭)にアンケート調査を実施した。

「絵本」、「はがき」、「ポスター」、「その他」のツールを使うとあいさつを促せるかという質問に対しての結果が以下の通りである(図2)。

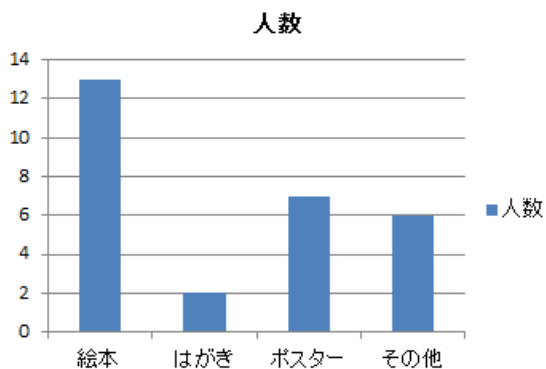


図2 アンケート結果

図2のグラフで絵本とポスターが上位を占めていた。故に、ポスターと絵本を使用し、検証を行った。ターゲットは模倣期が見られる3歳児をターゲットとした。

4.2 実験

12月10日~13日滝川白樺幼稚園にて、3歳児18人を対象に朝・昼・帰りに図3のポスターと図4の絵本を使い、子ども達がそれらに興味を持ち、模倣しながらあいさつを楽しくできたかを評価させた。結果は、18人全員とても興味を示したという回答だった。



図3 ポスター



図4 絵本

5 まとめ

あいさつ(朝・昼・帰り)を4日間検証した結果、とても興味を示し、楽しくあいさつを行うことができた。それは、模倣期を活用して何度もあいさつを行った結果であり、本研究の目的は達成されたといえる。また、ツールと共に環境(しつけ・教育)が特に重要であり、幼稚園は教育カリキュラムに沿って教育を行っている事が明らかとなった。

参考文献

- [1] 実践女子大学生生活環境学科環境デザイン研究室, 槇 究
<http://www.jissen.ac.jp/kankyo/labmaki2/maki/essay/essay30.html>
参照Dec14, 2013.
- [2] 新村出編, 広辞苑第六版, 岩波書店, 2008.
- [3] 青木 裕, 成功するITマネージャーの「人づきあい術」, アイティメディア株式会社, 2013.